佛説観無量寿経

宋元嘉中 畺良耶舎訳

○第一

①かくのごときを我れ聞きき。②一時、③佛、④王舎城の耆闍崛山の中に在して、⑥大比⑦丘衆⑧千二百五十人と⑨俱なりき。⑤⑩菩薩三万二千あり、⑪文殊師利法王子を⑫上首とす。

⑭その時、⑮王舎大城に一りの太子あり、阿闍世と名づく。調達悪友の教えに随順して、⑯父王頻婆娑羅を収執し、幽閉して、七重の室内に置けり。諸もろの群臣を制して、一りも往くことを得ざらしむ。⑰国の大夫人を韋提希と名づく。大王を恭敬して、澡浴清浄にして、酥蜜をもって麨に和して、もってその身に塗り、諸もろの瓔珞の中に、蒲桃の漿を盛れて、ひそかにもって王に上る。⑱その時大王、麨を食し漿を飲み、水を求めて口を漱ぐ。口を漱ぎおわって、合掌恭敬して、耆闍崛山に向かって、遥かに世尊を礼して、この言を作さく。大目犍

○第一　序分(一)

① 証信序

② 発起序(七)、化前序(四)、起化時

③ 標二化主一

④ 遊化処

⑤ 明二徒衆一(二)、声聞衆(九)、兼レ衆

⑥ 総大

⑦ 相大

⑧ 衆大

⑨ (耆年)数大(尊宿、実徳、果大)

⑩ 菩薩衆(七)、標レ相

⑪ 標レ数(標レ位、標レ果、標レ徳)

⑫ 別顕

⑬ 総結

⑭ 禁父縁(七)、総起化レ処

⑮ 王信二悪人一

⑯ 父王幽禁

⑰ 夫人進レ食

⑱ 因レ禁請レ法

連は、これ吾が親友なり。願わくは慈悲を興して、我れに八戒を授けしめたまえ。⑲時に目犍連、鷹隼の飛ぶがごとく、疾く王の所に至る。日日かくのごとく、王に八戒を授く。世尊また尊者富楼那を遣わして、王の為に法を説かしむ。⑳かくのごとき時の間に、三七日を経たり。王、酥蜜を食し、法を聞くことを得るが故に、顔色和悦せり。

㉑時に阿闍世、守門の者に問わく。父王今者、なお存在せりや。㉒時に守門の人、大王にもうしてもうさく。国の大夫人は、身に麨蜜を塗り、瓔珞に漿を盛れて、もって王に上り、沙門目連および富楼那は、空より来って、王の為に説法す。禁制すべからず。㉓時に阿闍世、この語を聞きおわって、その母を怒っていわく。我が母はこれ賊なり。賊と伴なればなり。沙門は悪人なり、幻惑呪術をもって、この悪王をして多日に死せざらしむといって、すなわち利剣を執って、その母を害せんと欲す。㉔時に一りの臣あり。名づけて月光という。聴明多智なり。および耆婆と与に、王の為に礼を作して、もうしてもうさく。大王。臣、毘陀論経の説を聞くに、劫初より已来、諸もろの悪王あり。国位を貪ずるが故に、その父を殺害すること一万八千なり。いまだかつて、無道にして母を害することあることを聞かず。王今この殺逆の事をなさば、刹利種を汚さん。臣、聞くに忍びず。こ

⑲ 因レ請蒙レ法

⑳ 多日不レ死

㉑ 禁母縁(八)、問ニ父音信一

㉒ 門家答レ事

㉓ 世王瞋怒

㉔ 二臣切諫

れ旃陀羅なり。よろしくここに住せしむべからず。時に二大臣、この語を説きおわって、手をもって剣を按じて、郤行して退く。㉕時に阿闍世、驚怖惶懼して、耆婆に告げていわく。汝、我が為にせずや。㉖耆婆、もうしてもうさく。大王。慎んで母を害することなかれ。㉗王、この語を聞きて、懺悔して救わんことを求む。すなわち剣を捨て、止めて母を害せず。㉘内宦に勅語し、深宮に閉置して、また出だしめず。

㉙時に韋提希、幽閉せられおわって、愁憂憔悴して、㉚遙かに耆闍崛山に向かって、佛の為に礼を作して、この言を作さく。如来世尊、在昔の時は、恒に阿難を遣わして、来して我れを慰問したまいき。我れ今愁憂す。世尊は威重うして、見たてまつることを得るに由なし。願わくは目連・尊者阿難をして、我が与に相見せしめたまえ。この語を作しおわって、悲泣して涙を雨らし、遙かに佛に向かって礼したてまつる。いまだ頭を挙げざる頃に、㉛その時に世尊、耆闍崛山に在して、韋提希の心の所念を知ろしめして、すなわち大目犍連および阿難に勅して、空より来らしめ、佛は耆闍崛山より没して、王宮において出でたまう。時に韋提希、礼しおわって頭を挙ぐるに、世尊釈迦牟尼佛の、身は紫金色にして、百宝の蓮華に坐し、目連は左に侍し、阿難は右に在り、釈梵護世の諸天は、虚空の

㉕ 世王生レ怖
㉖ 二臣重諫
㉗ 闍王受諫
㉘ 余瞋禁母
㉙ 厭苦縁(四)、閉宮憔悴
㉚ 因レ禁請レ佛
㉛ 世尊来赴

中に在って、普く天華を雨らして、もって供養するを見る。㉜時に韋提希、佛世尊を見たてまつって、自ら瓔珞を絶ち、挙身、地に投じ、号泣して佛に向かって、もうしてもうさく。世尊。我れ宿何の罪あって、この悪子を生める。世尊また何等の因縁あって、提婆達多と共に眷属となりたまう。

㉝ただ願わくは世尊、我が為に広く憂悩なき処を説きたまえ、我れまさに往生すべし。閻浮提の濁悪世を楽わず。㉞この濁悪の処には、地獄・餓鬼・畜生盈満して、不善聚多し。願わくは我れ未来に、悪声を聞かず、悪人を見ざらん。㉟今世尊に向かって、五体を地に投じて、哀を求めて懺悔す。㊱ただ願わくは佛日、我れをして清浄業の処を観ぜしめたまえ。㊲その時に世尊、眉間の光を放ちたまう。その光、金色にして、徧く十方無量の世界を照らし、佛頂に還り住まりて、化して金台となる。須弥山のごとし。十方諸佛の浄妙の国土、皆中において現ず。あるいは国土あり、七宝をもて合成せり。また国土あり、純らこれ蓮華なり。また国土あり、自在天宮のごとし、また国土あり、玻瓈鏡のごとし。十方の国土、皆、中において現ず。かくのごとき等の無量の諸佛国土の厳顕にして観つべきあって、韋提希をして見せしめたまう。㊳時に韋提希、佛にもうしてもうさく。世尊。この諸もろの佛土、また清浄にして、皆光明ありといえども、㊴我れ

㉜ 見佛傷歎

㉝ 欣浄縁(八)、通請二所求一

㉞ 挙二所厭境一

㉟ 恐有二餘懺一

㊱ 通請去行

㊲ 酬二前通請一

㊳ 総領二所現一

㊴ 別選所求

今極楽世界の阿弥陀佛の所に生ぜんことを楽う。㊵ただ願わくは世尊、我れに思惟を教えたまえ、我れに正受を教えたまえ。

㊶その時世尊、すなわち微笑したまうに、五色の光あって、佛口より出づ。一一の光、頻婆娑羅の頂を照らす。その時大王、幽閉にありといえども、心眼障りなくして、遙かに世尊を見たてまつり、頭面に礼を作すに、自然に増進して、阿那含を成ず。

㊷その時世尊、韋提希に告げたまわく。汝今知るやいなや、阿弥陀佛、ここを去ること遠からず。汝まさに念を繫けて、諦かにかの国を観ずべし。浄業成ぜん者なり。我れ今汝が為に、広く衆もろの譬を説かん。㊸また未来世の一切凡夫の浄業を修せんと欲する者をして、西方極楽国土に生ずることを得せしめん。㊹かの国に生ぜんと欲さん者は、まさに三福を修すべし。一つには、父母に孝養し、師長に奉事し、慈心にして殺さず、十善業を修す。二つには、三帰を受持し、衆戒を具足して、威儀を犯せず。三つには、菩提心を発し、深く因果を信じ、大乗を読誦し、行者を勧進す。かくのごとき三事を、名づけて浄業とす。㊺佛、韋提希に告げたまわく。汝今知るやいなや。この三種の業は、過去・未来・現在、三世諸佛の浄業の正因なり。

㊵ 請二求別行一

㊶ 散善縁㈤、光益二父王一

㊷ 答二別求行一

㊸ 挙レ機勧レ益

㊹ 勧二修三福一

㊺ 引レ聖励レ凡

㊻佛、阿難および韋提希に告げたまわく。諦かに聴き諦かに聴け、善くこれを思念せよ。如来今者、未来世の一切衆生の、煩悩の賊に害せらるる者の為に、清浄業を説かん。㊼善きかな韋提希、快くこの事を問えり。㊽阿難。汝まさに受持して、広く多衆の為に、佛語を宣説すべし。㊾如来今者、韋提希および未来世の一切衆生をして、西方極楽世界を観ぜしめん。佛力をもっての故に、まさにかの清浄国土を見ることを得ること、明鏡を執って、自ら面像を見るがごとくなるべし。かの国土の極妙の楽事を見て、心歓喜するが故に、時に応じてすなわち無生法忍を得ん。㊿佛、韋提希に告げたまわく。汝はこれ凡夫にして、心想羸劣なり。いまだ天眼を得ざれば、遠く観ること能わず。諸佛如来に異の方便あり、汝をして見ることを得せしめん。(51)時に韋提希、佛にもうしてもうさく。世尊。我がごときは今者、佛力をもっての故に、かの国土を見たてまつる。(52)もし佛滅後の諸もろの衆生等は、濁悪不善にして、五苦に逼められん。云何がまさに阿彌陀佛の極楽世界を見たてまつるべきや。

○第二

(53)佛、韋提希に告げたまわく。汝および衆生、まさに心を専らにして、念を一処

㊻ 定善縁(七)、勅レ聴許レ説

㊼ 問当二聖意一

㊽ 勧レ持勧レ説

㊾ 勧二修得益一

㊿ 説二他力見一

(51) 領二解佛意一

(52) 為レ物致レ請

○第二　正宗(六)

(53) 定善答請(三)、日想観(五)、総告総勧

に繋けて、西方を想うべし。[54]云何が想を作さん。およそ想を作すとは、一切衆生、生盲にあらざるより、目ある徒がら、皆日の没するを見よ。[55]まさに想念を起して、正坐して西に向かい、諦かに日を観ずべし。心をして堅住し、想を専らにして移さざらしめて、日の没せんと欲して、状、懸鼓のごとくなるを見よ。[56]すでに日を見おわりなば、目を閉じ目を開かんに、皆明了ならしめよ。[57]これを日想とす。名づけて初観という。

[58]次に水想を作せ。水の澂清なるを見て、また明了にして、分散の意なからしめよ。すでに水を見おわりなば、まさに氷想を起すべし。氷の映徹せるを見て、瑠璃の想を作せ。この想、成じおわりなば、瑠璃地の内外映徹せるを見よ。[59]下に金剛の七宝の金幢あって、[60]瑠璃地を擎ぐ。その[61]幢八方にして、八楞具足せり。[62]一一の方面は、百宝の所成なり。[63]一一の宝珠に、千の光明あり。[64]一一の光明に、八万四千の色あって、[65]瑠璃地に映ず。億千の日のごとくにして、具に見るべからず。[66]瑠璃地の上には、黄金の縄をもって、雑廁間錯せり。七宝をもって界いて、分斉分明なり。[67]一一の宝の中に、五百色の光あり。その光、[68]華のごとく、また星月に似たり。[69]虚空に懸処して、光明台となる。[70]楼閣千万あり。百宝をもって合成せり。[71]台の両辺において、各おの百億の華幢、[72]無量の楽器あり、

[54] 牒二所観事一
[55] 正教二観察一
[56] 弁二観成相一
[57] 総結二観名一
[58] 水想観(六)、総標二地体一
[59] 地下荘厳(七)、幢体等無漏金剛
[60] 擎地相顕映荘厳
[61] 方楞具表レ非二円相一
[62] 宝合成量出二塵沙一
[63] 宝出光問無辺際
[64] 光変現随レ機得レ益
[65] 衆光移映二絶日輪一
[66] 地上荘厳
[67] 空裏荘厳(六)、宝出二多光一
[68] 喩顕二其相一
[69] 光変成レ台
[70] 光変成レ楼
[71] 光変成幢
[72] 光変成レ楽

もって荘厳とす。[73]八種の清風、光明より出でて、[74]この楽器を鼓して、[75]苦・空・無常・無我の音を演説せしむ。[76]これを水想とす。第二の観と名づく。

[77]この想成ずる時、[78]一一にこれを観じて、[79]極めて了了ならしめよ。[80]目を閉じ目を開くにも、散失せしめざれ。[81]ただ睡時を除いて、恒にこの事を憶え。[82]かくのごとく想するを、名づけてほぼ極楽国の地を見るとす。[83]もし三昧を得れば、かの国地を見ること、了了分明なり。具に説くべからず。[84]これを地想とす。第三の観と名づく。[85]佛、阿難に告げたまわく。[86]汝、佛語を持して、[87]未来世の一切大衆の苦を脱せんと欲する者の為に、[88]この観地の法を説け。[89]もしこの地を観ずる者は、[90]八十億劫生死の罪を除き、[91]身を他世に捨てて、必ず浄国に生ず。[92]心に疑いなきことを得よ。[93]この観を作すをば、名づけて正観とす。もし他観するをば、名づけて邪観とす。

[94]佛、阿難および韋提希に告げたまわく。地想成じおわりなば、次に宝樹を観ぜよ。[95]宝樹を観ずとは、一一にこれを観じて、七重行樹の想を作せ。[96]一一の樹の高さ八千由旬なり。[97]その諸もろの宝樹、七宝の華葉、具足せずということなし。[98]一一の華葉、異の宝色を作す。[99]瑠璃色の中より金色の光を出だし、玻瓈色の中より紅色の光を出だし、碼碯色の中より砗磲の光を出だし、砗磲色の中より緑

[73] 楽音説法(三)、風従光而出
[74] 風光鼓レ楽発レ音
[75] 説二四倒四真等一
[76] 総結二観名一
[77] 地想観(六)、結レ前生レ後
[78] 弁二観成相一(六)、心標二一境一不二雑観一
[79] 専二一境一境即現前
[80] 境現心守令レ莫レ失
[81] 四威儀憶持不レ捨
[82] 疑レ心不レ絶見二浄相一
[83] 正受相応真見レ彼
[84] 総結二観名一
[85] 勧二発流通一(四)、明二告命一
[86] 明二勧持一
[87] 簡二機堪一
[88] 正教観
[89] 顕二観利益一(四)、唯観二宝地一不レ論二余境一
[90] 観二無漏地一除有二漏罪一
[91] 捨身已後必生二浄土一
[92] 修国正念不レ得レ雑レ疑
[93] 明二観邪正一
[94] 宝樹観(三)、結レ前生レ後
[95] 牒レ名教相
[96] 樹之体重
[97] 雑樹厳飾(四)、華葉問雑不同
[98] 根基等具二衆宝一
[99] 宝光転相問雑

真珠の光を出だす。[100]珊瑚・琥珀、一切の衆宝、もって映飾とせり。[101]妙真珠の網、樹の上に弥覆せり。[102]一一の樹の上に七重の網あり。[103]一一の網の間に、五百億の妙華宮殿あり。梵王宮のごとし。[104]諸もろの天童子、自然に中にあり。[105]一一の童子、五百億の釈迦毘楞伽摩尼宝をもって瓔珞とせり。[106]その摩尼の光、百由旬を照らす。なおし百億の日月を和合せるがごとし。具に名づくべからず。[107]衆宝間錯して、色中の上れたる者なり。[108]この諸もろの宝樹、行行相当り、葉葉相次げり。衆葉の間において、諸もろの妙華を生ず。華の上に自然に、七宝の果あり。[109]一一の樹葉、縦広正等にして二十五由旬なり。[110]その葉、千色にして百種の画あり。[111]天の瓔珞のごとし。[112]衆もろの妙華あり、閻浮檀金の色を作せり。旋火輪のごとく、[113]葉の間に婉転す。[114]涌生せる諸もろの果、[116]帝釈の餅のごとし。[116]大光明あり、化して幢旛、無量の宝盍と成る。[117]この宝盍の中に、三千大千世界の一切の仏事を映現す。[118]十方の仏国、また中において現ず。[119]この樹を見おわりなば、[120]たまさに次第に一一にこれを観ずべし。[121]樹茎枝葉葉果を観見して、皆分明ならしめよ。[122]これを樹想とす。第四の観と名づく。

[123]次にまさに水を想うべし。水を想うとは、[124]極楽国土に[125]八池水あり。[126]一一の池水、七宝の所成なり。[127]その宝柔軟にして、[128]如意珠王より生ず。[129]分かれて十四支

[100] 一切雑宝厳飾
[101] 樹上荘厳(七)、珠網覆樹
[102] 網有二多重一
[103] 宮殿多少
[104] 宮内童子
[105] 服珠瓔珞
[106] 瓔珞光照
[107] 光超上色
[108] 林樹無レ乱
[109] 華葉色相(五)、葉量等無二差別一
[110] 葉出二光色一多少
[111] 恐二疑不レ識借レ譬
[112] 色比レ金相喩レ輪
[113] 迭相照転二葉間一
[114] 菓有二徳用一(五)、生時自然二涌出
[115] 借喩以標二菓相一
[116] 菓神光成二幡蓋一
[117] 宝蓋現二三千界一
[118] 十方浄土現レ蓋
[119] 弁二観成相一(三)、結二観成相一
[120] 次第不レ乱
[121] 住レ境明了
[122] 総結二観名一
[123] 宝地観(七)、明二牒レ前生レ後一
[124] 明池数出処(五)、標二所帰国一
[125] 池有二八種名一

となる。[130]一一の支、七宝の色を作す。黄金を渠とす。[131]渠の下には皆雑色の金剛をもって、もって底沙とす。[132]一一の水の中に、[133]六十億の七宝の蓮華あり。[134]一一の蓮華、団円正等にして十二由旬なり。[135]その摩尼の水、華の間に流れ注ぎて、[136]樹を尋ねて上下す。[137]その声微妙にして、苦・空・無常・無我・諸波羅蜜を演説す。また諸仏の相好を讃歎する者あり。[138]如意珠王より、金色微妙の光明を涌出す。[139]その光、化して、百宝色の鳥となる。[140]和鳴哀雅にして、[141]常に念仏・念法・念僧を讃ず。[142]これを八功徳水の想とす。第五の観と名づく。

[143]衆宝国土の[144]一一の界の上に、[145]五百億の宝楼閣あり。[146]その楼閣の中に、無量の諸天あって、天の伎楽を作す。[147]また楽器あり、虚空に懸処せり。天の宝幢のごとく、鼓せざるに自から鳴る。[148]この衆音の中に、皆念仏・念法・念比丘僧を説く。[149]この想成じおわるを、名づけてほぼ極楽世界の宝樹宝地宝池を見るとす。[150]これを総観の想とす。第六の観と名づく。[151]もしこれを見る者は、[152]無量億劫の極重の悪業を除いて、命終の後、必ずかの国に生ず。[153]この観を作すをば、名づけて正観とす。もし他観するをば、名づけて邪観とす。

[154]佛、阿難および韋提希に告げたまわく。[155]諦かに聴き諦かに聴け、善くこれを思念せよ。[156]佛まさに汝が為に苦悩を除く法を分別し解説すべし。[157]汝等憶持して、広

[126] 池岸宝成
[127] 宝体柔軟
[128] 水従珠出
[129] 明二池分一異溜一(三)、渠数多少
[130] 渠岸金色
[131] 渠下レ底沙
[132] 水不思議用(五)、別指二渠名一
[133] 渠内宝華
[134] 華量大小
[135] 宝水流注
[136] 宝水無碍
[137] 水不思議徳
[138] 摩尼有神徳(四)、珠玉内出レ光
[139] 珠光化作レ鳥
[140] 鳥声無比方
[141] 連レ音歎二三宝一
[142] 総結二宝池観一
[143] 宝楼観(二)、牒レ前生レ後
[144] 宝楼住処
[145] 正顕其数
[146] 閣内荘厳
[147] 楼外荘厳
[148] 楽器説法
[149] 顕観成相
[150] 総結楼観
[151] 牒レ前生レ後
[152] 滅罪往生
[153] 弁二観邪正一
[154] 華座観(六)、勅聴許レ説(三)、明レ告二命二人一

く大衆の為に、分別し解説せよ。[158]この語を説きたまう時、[159]無量寿佛、[160]空中に住立したまう。[161]観世音・大勢至、この二大士、左右に侍立したまう。[162]光明熾盛なり。[163]具に見るべからず、[164]百千の閻浮檀金の色も、比となすことを得ず。[165]時に韋提希、無量寿佛を見たてまつりおわって、足を接して礼を作し、佛にもうしてもうさく。世尊。我れ今佛力に因るが故に、無量寿佛および二菩薩を見たてまつることを得たり。[167]未来の衆生、まさに云何が無量寿佛および二菩薩を観たてまつるべきや。[168]佛、韋提希に告げたまわく。かの佛を観んと欲さば、まさに想念を起すべし。[169]七宝の地の上において、蓮華の想を作せ。[170]その蓮華の一一の葉をして、百宝の色を作さしめよ。[171]八万四千の脈あり、なおし天の画のごとし。[172]脈に八万四千の光あり。[173]了了分明にし、皆見ることを得しめよ。[174]華葉の小なる者は、縦広二百五十由句なり。[175]かくのごとき蓮華に八万四千の葉あり。[176]一一の葉の間に各おの百億の摩尼珠王あって、もって映飾とせり。[177]一一の摩尼より千の光明を放つ。[178]その光、盍のごとくにして、七宝合成せり。[179]徧く地上に覆えり。[180]釈迦毘楞伽宝を、もってその台とす。この蓮華台は、八方の金剛・甄叔迦宝・梵摩尼宝・妙真珠網を、もって交飾とせり。[181]その台の上において、自然に四柱の宝幢あり。[182]一一の宝幢、百千万億の須弥山のごとし。[183]幢上の宝幔は、夜

[155] 勅聴令二修行一
[156] 為二説一座観法一
[157] 勧二発流通一
[158] 二尊許聴(七)、明下告二観一
[159] 二人時上
[160] 弥陀応レ声即境
[161] 弥陀在レ空局立
[162] 二大士為侍者
[163] 三尊光明踰盛
[164] 佛光朗照二十方一
[165] 有漏天金不レ比
[166] 得レ蒙二稽首一
[167] 領二荷佛恩一
[168] 為レ物置レ請
[169] 総告許レ説
[170] 教二観方便一
[171] 宝華荘厳(三)、華葉備二衆宝色一
[172] 一一葉有二宝脈一
[173] 一一脈有二光色一
[174] 弁二観成相一
[175] 華葉荘厳(六)、華葉大小
[176] 衆映多少
[177] 珠有二千光一
[178] 珠光変レ蓋
[179] 照レ空覆レ地
[180] 台上荘厳
[181] 幢上荘厳(四)、台上自有二四幢一

摩天宮のごとし。[184]五百億の微妙の宝珠あって、もって映飾とせり。[185]一一の宝珠に八万四千の光あり。[186]一一の光、八万四千の異種の金色を作す。[187]一一の金色、その宝土に徧し。[188]処処に変化して、各おの異相を作す。[189]あるいは金剛台となり、あるいは真珠網となり、あるいは雑華雲となって、十方の面において、意に随って変現して仏事を施作す。[190]これを華座の想とす。第七の観と名づく。[191]仏、阿難に告げたまわく。かくのごとき妙華は、これ本、法蔵比丘の願力の所成なり。[192]もしかの仏を念わんと欲せば、まさにまずこの華座の想を作すべし。この想を作す時、雑観することを得ざれ。皆まさに一一にこれを観ずべし。一一の葉、一一の珠、一一の光、一一の台、一一の幢、皆分明ならしむること、鏡中において、自ら画像を見るがごとくせよ。[193]この想成ずる者は、五万劫の生死の罪を滅除して、[194]必定してまさに極楽世界に生ずべし。[195]この観を作すをば、名づけて正観とす。もし他観するをば、名づけて邪観とす。

[196]仏、阿難および韋提希に告げたまわく。この事を見おわりなば、次にまさに仏を想うべし。[197]所以は何ん。諸仏如来はこれ法界身なり。一切衆生の心想の中に入りたまう。[198]この故に汝等、心に仏を想う時、この心すなわちこれ三十二相八十随形好なり。この心仏を作る、この心これ仏なり。諸仏正徧知海は、心想

[182] 幢之体量ノ大小
[183] 宝幔状似天宮
[184] 幢上珠光ノ映飾
[185] 珠光ノ徳用(五)、珠有ニ多光一
[186] 光作ニ異色一
[187] 色徧ニ宝土一
[188] 異種荘厳
[189] 徧ニ満十方一
[190] 総結ニ観名一
[191] 得成ノ所由
[192] 重顕観儀
[193] 結ニ観成相一(二)、除罪益ノ
[194] 得生益ノ
[195] 弁ニ観邪正一
[196] 像想観(三)、結レ前生レ後
[197] 諸仏ノ応現
[198] 結ニ勧ノ利益一

より生ず。[199]この故にまさに一心に念を繫けて、諦かにかの佛・多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀を観ずべし。[200]かの佛を想わん者は、まずまさに像を想うべし。[201]目を閉じ目を開くにも、一つの宝像の閻浮檀金の色のごとくにして、[202]かの華の上に坐したまうを見よ。[203]像の坐したまうを見おわりなば、心眼開くことを得て、[204]了了分明に、極楽国の七宝の荘厳・宝地・宝池・宝樹行列し、諸天の宝幔、その上に弥覆し、衆宝の羅網、虚空の中に満つるを見ん。かくのごとき事を見ば、極めて明了なること、掌中を観るがごとくならしめよ。[205]この事を見おわりなば、[206]またまさにさらに一つの大蓮華を作して、佛の左辺におくべし。前の蓮華のごとく、等しくして異なることあることなし。また一つの大蓮華を作して、佛の右辺におけ。一りの観世音菩薩の像の、左の華座に坐するを想え。また金光を放つこと、前のごとくにして異なることなし。一りの大勢至菩薩の像の、右の華座に坐するを想え。[207]この想成ずる時、佛菩薩の像、皆光明を放つ。その光、金色にして、諸もろの宝樹を照らす。一一の樹下に、また三蓮華あり。諸もろの蓮華の上に、各おの一佛二菩薩の像あって、かの国に徧満す。[208]この想成ずる時、行者まさに水流光明および諸もろの宝樹・鳧・鴈・鴛鴦、皆妙法を説くを聞くべし。出定入定に、恒に妙法を聞かん。行者の所聞、出定の時、憶持して捨て

[199] 教勧二観佛一
[200] 牒前生後
[201] 弁二観成相一(四)、四威儀見レ像作レ想
[202] 前華座上想二像坐一
[203] 想二見像坐一心眼開
[204] 見二金像及諸荘厳一
[205] 結レ上生レ後
[206] 二菩薩観
[207] 明多身観
[208] 明三説法相一

ず。[209]修多羅と合せしめよ。もし合せざるをば、名づけて妄想とす。もし合することあるをば、名づけて麤想をもって、極楽世界を見るとす。[210]これを像想とす。第八の観と名づく。[211]この観を作す者は、無量億劫の生死の罪を除き、現身の中において、念仏三昧を得ん。

[212]佛、阿難および韋提希に告げたまわく。この想成じおわりなば、次にまさにさらに無量寿佛の身相光明を観ずべし。[213]阿難まさに知るべし。無量寿佛の身は、百千万億の夜摩天の閻浮檀金の色のごとし。[214]佛身の高さ、六十万億那由他恒河沙由旬なり。[215]眉間の白毫は右に旋って婉転せり。五須弥山のごとし。[216]佛眼は四大海水のごとし。青白分明なり。[217]身の諸もろの毛孔より光明を演出すること、須弥山のごとし。[218]かの佛の円光は、百億三千大千世界のごとし。[219]円光の中において、百万億那由他恒河沙の化佛あり。[220]一一の化佛に、また衆多無数の化菩薩あって、もって侍者とせり。[221]無量寿佛に八万四千の相あり。[222]一一の相に、各おの八万四千の隨形好あり。[223]一一の好に、また八万四千の光明あり。[224]一一の光明、徧く十方世界を照らして、[225]念仏の衆生を摂取して捨てたまわず。[226]その光明相好および化佛、具に説くべからず。[227]ただまさに憶想して、心眼をして見せしむべし。[228]この事を見る者は、すなわち十方一切の諸佛を見たてまつる。[229]諸佛を見たて

[209] 弁二観邪正一
[210] 総結二観名一
[211] 現象二利益一
[212] 真身観(三)、結レ前生レ後
[213] 真佛身色
[214] 身量大小
[215] 総観二身相一(六)、毫相大小
[216] 眼相大小
[217] 毛光大小
[218] 円光大小
[219] 化佛多少
[220] 侍者多少
[221] 観二身別相一(五)、相多少
[222] 好多少
[223] 光多少
[224] 照遠近
[225] 光摂益
[226] 結少頭レ多
[227] 憶想令レ見
[228] 観益得レ成(五)、因観見二諸佛一
[229] 成二念佛三昧一

まつるをもっての故に、念佛三昧と名づく。[230]この観を作すをば、一切の佛身を観ずと名づく。[231]佛身を観ずるをもっての故に、また佛心を見る。[232]佛心とは、大慈悲これなり。無縁の慈をもって、諸もろの衆生を摂したまう。[233]この観を作す者は、身を他世に捨てて、諸佛の前に生じて無生忍を得。[234]この故に智者まさに心を繫けて、諦かに無量寿佛を観ずべし。[236]無量寿佛を観ぜん者は、一の相好より入れ。ただ眉間の白毫を観じて、極めて明了ならしめよ。眉間の白毫を見たてまつる者は、八万四千の相好、自然にまさに現ずべし。[237]無量寿佛を見たてまつる者は、すなわち十方無量の諸佛を見たてまつる。[238]無量の諸佛を見ることを得るが故に、諸佛現前に授記したまう。[239]これを徧く一切の色身を観ずる想とす。第九の観と名づく。[240]この観を作すをば、名づけて正観とす。もし他観するをば、名づけて邪観とす。

[241]佛、阿難および韋提希に告げたまわく。無量寿佛を見たてまつること了了分明にしおわりなば、次にまたまさに観世音菩薩を観ずべし。[242]この菩薩の身の長、八十万億那由他由旬なり。[243]身は紫金色なり、[244]頂に肉髻あり。[245]項に円光あり。面各おの百千由旬なり。[246]その円光の中に五百の化佛あり。釈迦牟尼佛のごとし。一一の化佛に五百の化菩薩あり。無量の諸天を、もって侍者とせり。[247]挙

[230] 観二一切佛身一
[231] 観レ身見二佛心一
[232] 明二慈悲為レ体
[233] 得生彼益
[234] 重勧二利益一(五)、簡二出能修観人一
[235] 専心観二彌陀佛一
[236] 観二一相一衆相現
[237] 見二彌陀一見二諸佛一
[238] 於二定中一蒙二授記一
[239] 結二佛身観一
[240] 弁二観邪正一
[241] 観音観(三)、結レ前生レ後
[242] 総操二身相一(六)、明二身量之大小一
[243] 身色与レ佛不レ同
[244] 肉髻与レ佛不レ同
[245] 明二円光之大小一
[246] 化佛侍者多少
[247] 身光普現二五道一

身の光中に、五道の衆生の一切の色相、皆中において現ず。[248]頂上には、毘楞伽摩尼宝を、もって天冠とせり。その天冠の中に一りの立てる化仏あり。高さ二十五由旬なり。[249]観世音菩薩の面は閻浮檀金の色のごとし。[250]眉間の毫相に七宝の色を備えたり。[251]八万四千種の光明を流出す。[252]一一の光明に無量無数百千の化仏あり。[253]一一の化仏、無数の化菩薩をもって侍者とせり。[254]変現自在にして十方世界に満つ。譬えば紅蓮華の色のごとし。[255]八十億の光明あり。もって瓔珞とせり。その瓔珞の中に普く一切の諸もろの荘厳の事を現ず。[256]手掌には、五百億の雑蓮華の色を作せり。[257]手の十指の端、一一の指端に八万四千の画あり。なおし印文のごとし。[258]一一の画に八万四千の色あり。[259]一一の色に八万四千の光あり。[260]その光柔軟にして普く一切を照らす。この宝手をもって衆生を接引す。[261]足を挙ぐる時、足下に千輻輪の相あり。自然に化して五百億の光明台となる。足を下す時、金剛摩尼の華あり。一切に布散して弥満せずということなし。[262]その余の身相、衆好具足せり。[263]佛のごとくにして異なることなし。[264]ただ頂上の肉髻とおよび無見頂相とのみ世尊に及ばず。[265]これを、観世音菩薩の真実の色身を観ずる想とす。第十の観と名づく。[266]佛、阿難に告げたまわく。もし観世音菩薩を観ぜんと欲する者あらば、まさにこの観を作すべし。[267]この観を作す者は諸禍に遇わず。業

[248] 天冠化仏
[249] 面色異レ身
[250] 毫光転変(五)、毫相宝色
[251] 毫光多少
[252] 光有二化仏一
[253] 侍者多少
[254] 化侍変現
[255] 身服光瓔
[256] 手慈悲用(六)、掌作二華色一
[257] 指端印文
[258] 印文有レ色
[259] 色有二光明一
[260] 光体柔軟
[261] 接二引一有縁一
[262] 足徳用相
[263] 指同二於佛一
[264] 明二師徒別一
[265] 総結二観名一
[266] 結レ前生レ後
[267] 勧二観利益一

障を浄除し、無数劫の生死の罪を除く。かくのごとき菩薩は、ただその名を聞くすら無量の福を獲。何にいわんや諦かに観ぜんをや。[268]もし観世音菩薩を観ぜんと欲する者あらば、まず頂上の肉髻を観じ、次に天冠を観ぜよ。その余の衆相、また次第にこれを観じて、また明了なること掌中を観るがごとくならしめよ。[269]この観を作すをば、名づけて正観とす。もし他観するをば、名づけて邪観とす。

[270]次にまたまさに大勢至菩薩を観ずべし。[271]この菩薩の身量大小、また観世音のごとし。[272]円光は、面各おの百二十五由旬なり。[273]二百五十由旬を照らす。[274]挙身の光明、[275]十方の国を照らすに紫金の色を作せり。[276]有縁の衆生は皆悉く見ることを得。[277]ただこの菩薩の一毛孔の光を見れば、すなわち十方無量の諸仏の浄妙の光明を見たてまつる。[278]この故にこの菩薩を号して無辺光と名づく。[279]智慧の光をもって普く一切を照らす。[280]三塗を離れしむるに無上力を得たり。[281]この故にこの菩薩を号して大勢至と名づく。[282]この菩薩の天冠に五百の宝華あり。[283]一一の宝華に五百の宝台あり。[284]一一の台の中に、十方諸仏の浄妙の国土の広長の相、皆中において現ず。[285]頂上の肉髻は盌頭摩華のごとし。肉髻の上において、一つの宝缾あり。諸もろの光明を盛れて、普く仏事を現ず。[286]余の諸もろの身相は、観世音

[268] 重顕二観儀一
[269] 弁観二邪正一
[270] 勢至観(三)、総挙二勢至観名一
[271] 弁二勢至観之相一(五)、身量等類二観音一(身色等類観音、面相等類観音、光相等類観音、毫相等類観音)
[272] 円光不レ同二観音一(四)、円光大小
[273] 光照遠近(化仏多少、侍者多少)
[274] 身光照二益有縁一(八)、身光総別
[275] 光照遠近
[276] 光所触色
[277] 宿業親触
[278] 見レ少見レ多
[279] 依レ光立レ名
[280] 光之体用
[281] 依レ徳立レ名
[282] 天冠不レ同二観音一(四)、冠上宝華多少
[283] 華上宝台多少
[284] 台中映二現浄土一(他土現無二増減一)
[285] 肉髻宝瓶之相
[286] 指同二観音菩薩一

のごとく、等しくして異なることあることなし。(287)この菩薩行く時、(288)十方の世界、一切震動す。(289)地の動ずる処に当って、五百億の宝華あり。(290)一一の宝華、荘厳高顕なること極楽世界のごとし。(291)この菩薩坐する時、(292)七宝の国土、一時に動揺す。(293)下方の金光佛刹よりすなわち上方の光明王佛刹に至るまで、(294)その中間において、無量塵数の分身の無量寿佛、分身の観世音・大勢至、皆悉く雲のごとく極楽国土に集まり、(295)空中に側たち塞がりて蓮華座に坐し、(296)妙法を演説して、苦の衆生を度したまう。(297)この観を作すをば、名づけて正観とす。もし他観するをば、名づけて邪観とす。大勢至菩薩を見る、これを大勢至の色身を観ずる想とす。第十一の観と名づく。(298)この菩薩を観ずる者は、無量劫阿僧祇の生死の罪を除く。(299)この観を作す者は、胞胎に処せず。常に諸佛浄妙の国土に遊ぶ。(300)この観成じおわるを、名づけて具足して観世音・大勢至を観ずとす。

(301)この事を見る時、(302)まさに自心を起すべし。(303)西方極楽世界に生じて、(304)蓮華の中において、結跏趺坐し、(305)蓮華合する想を作し、(306)蓮華開くる想を作せ。(307)蓮華開く時、五百色の光あって、来って身を照らすと想え。(308)眼目開くと想え。(309)佛菩薩の虚空の中に満ちたまえるを見るとき、(310)水鳥樹林および諸佛の出だす所の音声、皆妙法を演ぶ。(311)十二部経と合す。出定の時、(312)憶持して失せざれ。この事を見おわ

(287) 行与二観音一不レ同(四)、行不同相
(288) 震動遠近
(289) 動処華現
(290) 類二極楽界一
(291) 坐不レ同二観音一相(七)、明二坐之相一
(292) 先動本国（次動他方）
(293) 動二下上刹一
(294) 分身雲集
(295) 臨空坐華
(296) 分身説法
(297) 弁二邪正一結二分斉一
(298) 修観利益除レ罪
(299) 結レ前重生二後益一
(300) 牒二一身一弁二観成一
(301) 普想観(六)、牒レ前生レ後
(302) 自往生想(九)、自生想
(303) 向レ西想
(304) 坐レ華想
(305) 華合想
(306) 華開想
(307) 照身想
(308) 眼開想
(309) 見佛想
(310) 聞法想
(311) 定散常憶
(312) 観成之益

るを、無量寿佛の極楽世界を見ると名づく。[313]これを普観想とす。第十二の観と名づく。[314]無量寿佛、化身無数にして、観世音・大勢至と与に、常にこの行人の所に来至したまう。

[315]佛、阿難および韋提希に告げたまわく。もし至心あって、西方に生ぜんと欲せば、[316]まずまさに一つの丈六の像の、池水の上に在すを観ずべし。[317]先の所説のごとく、無量寿佛は身量無辺なり。これ凡夫、心力の及ぶ所にあらず。[318]しかるにかの如来、宿願力の故に、憶想することあれば、必ず成就することを得。[319]ただ佛像を想うすら無量の福を得。何にいわんや佛の具足せる身相を観ぜんをや。[320]阿弥陀佛は、神通如意にして、十方国において変現したまうこと自在なり。[321]あるいは大身を現ずれば虚空の中に満ち、あるいは小身を現ずれば丈六八尺なり。[322]現ずる所の形、皆真金色なり。[323]円光の化佛および宝蓮華は、上に説く所のごとし。[324]観世音菩薩および大勢至、一切の処において身同じ。[325]衆生ただ首相を観て、これ観世音と知り、これ大勢至と知る。[326]この二菩薩、阿弥陀佛を助けて普く一切を化す。[327]これを雑想の観とす。第十三の観と名づく。

[328]佛、阿難および韋提希に告げたまわく。[329]上品上生の者とは、[330]もし衆生あって、[331]かの国に生ぜんと願ぜば、[332]三種の心を発すべし。[333]すなわち往生す。[334]何等をか

[313] 総結二観名一
[314] 重護念益
[315] 雑想観(一)、結勧生レ後
[316] 表レ真表地
[317] 難レ成勧レ小
[318] 想者皆成
[319] 比挍顕勝
[320] 所観皆真(二)、身通無碍
[321] 現二大小身一
[322] 皆作金色
[323] 与真無異
[324] 指同二前観一
[325] 勧レ観二二別一
[326] 遊方化益
[327] 総結観名
[328] 散善自説(三)、上輩観行善(一)、上品上生(二)、総明二告命一
[329] 弁二定其位一
[330] 総有生類(四)、能信之人
[331] 求二願往生一
[332] 発心多少
[333] 得生之益
[334] 弁二定三心(二)、佛自問自徴

三とす。[335]一つには至誠心、二つには深心、三つには廻向発願心なり。三心を具する者は、必ずかの国に生ず。[336]また三種の衆生あり、まさに往生を得べし。[337]何等をか三とす。一つには、慈心にして殺さず、諸もろの戒行を具す。[338]二つには、大乗の方等経典を読誦す。[339]三つには、六念を修行す。[340]廻向発願してかの国に生ぜんと願ず。この功徳を具して、[341]一日乃至七日すれば、すなわち往生を得。かの国に生ずる時、[342]この人、精進勇猛なるが故に、[343]阿弥陀如来、[344]観世音・大勢至・無数の化仏・百千の比丘・声聞大衆・無数の諸天・[345]七宝の宮殿と与なり。[346]観世音菩薩は金剛台を執り、大勢至菩薩と与に行者の前に至り、[347]阿弥陀仏は大光明を放って、行者の身を照らし、[348]諸もろの菩薩と与に手を授けて迎接したまう。[349]観世音・大勢至、無数の菩薩と与に、行者を讃歎して、その心を勧進す。[350]行者見おわって、歓喜踊躍し、自らその身を見れば、金剛台に乗じて仏後に随従す。[351]弾指の頃のごときにかの国に往生す。[352]かの国に生じおわって、[353]佛の色身の衆相具足したまえるを見たてまつり、[354]諸もろの菩薩の色相具足せるを見る。光明宝林、妙法を演説す。聞きおわってすなわち無生法忍を悟る。[355]須臾の間を経て、諸佛に歴事して、十方界に徧し。諸佛の前において、次第に授記せられ、[356]還って本国に到って、無量百千の陀羅尼門を得。[357]これを上品上生の者と名づく。

[335] 答二前三心一数
[336] 簡二機堪能一
[337] 受法不同(三)、修レ慈持レ戒
[338] 読誦大乗
[339] 修二行六念一
[340] 廻二所修業一
[341] 修行時節
[342] 迎接去時(二)、標二所帰一国一
[343] 顕二行精勤一
[344] 化主自来
[345] 大衆従迎
[346] 宝宮随衆
[347] 聖執レ台
[348] 彌陀光照
[349] 佛等接手
[350] 同声讃勧
[351] 乗台従レ佛
[352] 去時遅疾
[353] 華開遅疾
[354] 華開得益(三)、聞二妙法一悟二無生一
[355] 歴二事他方一授記
[356] 帰二本国一得二総持一
[357] 総結二上上一
[358] 上品中生(八)、総挙二位名一
[359] 六七八門(四)、或読誦不二読誦一

358上品中生の者とは、359必ずしも方等経典を受持し読誦せざれども、360善く義趣を解して、第一義において、心、驚動せず、361深く因果を信じて、大乗を謗せず。362この功徳をもって、廻向して極楽国に生ぜんと願求す。363この行を行ずる者、命終らんと欲する時、364阿弥陀仏、観世音・大勢至・無量の大衆と与に眷属に囲繞せられて、365紫金台を持して行者の前に至りたまい、366讃じてのたまわく。法子。汝大乗を行じて、第一義を解す。367この故に我れ今、来って汝を迎接すと。368千の化仏と与に、一時に手を授けたまう。369行者自ら見れば紫金台に坐せり。370合掌叉手して諸仏を讃歎したてまつる。371一念の頃のごときに、372すなわちかの国の七宝池の中に生ず。373この紫金台は大宝華のごとし。宿を経てすなわち開く。行者の身、紫磨金色となる。足下にまた七宝の蓮華あり。374佛および菩薩、倶時に光明を放って、行者の身を照らしたまう。375目すなわち開明なり。376前の宿習に因って、普く衆声を聞くに、純ら甚深の第一義諦を説く。377すなわち金台より下りて佛を礼し合掌して、世尊を讃歎したてまつる。378七日を経て、時に応じてすなわち阿耨多羅三藐三菩提において不退転を得、379時に応じてすなわち能く飛行して、徧く十方に至って諸佛に歴事し、380諸佛の所において諸もろの三昧を修し、381一小劫を経て無生忍を得、382現前に授記せらる。383これを上品中生の者と名づく。384

360 善解二大乗空義一
361 信二世出世因果一
362 廻二所業一指二所帰一
363 佛衆来応(五)、明二命延不レ久
364 佛与レ衆自来
365 侍者持レ台至
366 同声讃二所修一
367 恐疑言二我迎一
368 授手去時(五)、彌陀与二化佛一授手
369 蒙二授手一坐二紫金台一
370 行者讃二彌陀等衆一
371 明二正去時之遅疾一
372 到彼住二宝池之内一
373 華開不同
374 華聞後益(五)、明二佛光明照レ身
375 蒙レ照目即開明
376 人中所習還聞
377 親到二佛辺一讃レ徳
378 経二七日一得二無生一
379 他方得益(五)、身至二十方一
380 歴二供諸佛一
381 修二多三昧一
382 延時得レ忍
383 佛辺蒙レ記
384 総結二上中一

[385]上品下生の者とは、[386]また因果を信じて、[387]大乗を謗せず、[388]ただ無上道心を発す。この功徳をもって、[389]廻向して極楽国に生ぜんと願求す。[390]行者命終らんと欲する時、[391]阿彌陀佛および観世音・大勢至、諸もろの眷属と与に金蓮華を持して、五百の化佛を化作して、来ってこの人を迎えたまう。[392]五百の化佛、一時に手を授けて、[393]讃じてのたまわく。法子。[394]汝今清浄にして無上道心を発す。我れ来って汝を迎うと。この事を見る時、[396]すなわち自ら身を見れば、金蓮華に坐す。坐しおわれば華合し、[397]世尊の後に随って、すなわち[398]七宝池の中に往生することを得、[399]一日一夜にして蓮華すなわち開く。[400]七日の中にすなわち佛を見たてまつることを得。佛身を見るといえども、衆もろの相好において、心明了ならず。三七日の後において、すなわち了了として見たてまつる。衆もろの音声の、皆妙法を演ぶるを聞く。[401]十方に遊歴して諸佛を供養し、諸佛の前において甚深の法を聞く。三小劫を経て、百法明門を得て、歓喜地に住す。[402]これを上品下生の者と名づく。これを上輩生想と名づけ、第十四の観と名づく。

[403]佛、阿難および韋提希に告げたまわく。[404]中品上生の者とは、[405]もし衆生あって、[406]五戒を受持し八戒斎を持し諸戒を修行して[407]五逆を造らず、[408]衆もろの過患なからん。[409]この善根をもって廻向して西方極楽世界に生ぜんと願求す。[410]命終の時に

[385]上品下生(八)、総挙二位名一
[386]受法不同(三)、所信因果不定
[387]信雖二間断一不レ謗上諸善似レ無レ功
[388]廻二前正行一
[389]迎接去時(九)、行者命延不レ久
[390]佛与二聖衆一来応
[391]化佛同時授手
[392]聖衆同声等讃
[393]行者罪滅発心
[394]聖衆言二我来迎一
[396]坐二金蓮一籠々合
[397]随佛一念即生
[398]到レ彼在二宝池中一
[399]華開不同
[400]華開後益
[401]他方得益
[402]総結二上下一
[403]中輩観行善(三)、中品上生(八)、総明告命弁二定其位一
[404]簡機受法(四)、簡二機堪与二不堪一
[405]明レ受二持小乗戒一
[406]小戒不レ消二五逆一
[407]設有二余懺一改悔
[408]廻二所修業一
[409]迎接去時(六)、行者命延不レ久
[410]

臨んで、[411]阿彌陀佛、諸もろの比丘と与に、眷属に囲繞せられて、[412]金色の光を放って、その人の所に至って、[413]苦・空・無常・無我を演説し、出家の衆苦を離るることを得ることを讃歎したまう。[414]行者見おわって、心大いに歓喜す。自ら己身を見れば蓮華台に坐す。長跪合掌して、佛の為に礼を作す。いまだ頭を挙げざる頃に、すなわち極楽世界に往生することを得、[416]蓮華すなわち開く。[417]華の敷く時に当って、[418]衆もろの音声の、四諦を讃歎するを聞く。[419]時に応じてすなわち阿羅漢道を得、三明六通あって、八解脱を具す。[420]これを中品上生の者と名づく。

[421]中品中生の者とは、[422]もし衆生あって、もしは一日一夜、八戒斎を受持し、[423]もしは一日一夜、沙弥戒を持し、[424]もしは一日一夜、具足戒を持し、威儀欠くることなく、[425]この功徳をもって廻向して極楽国に生ぜんと願求す。[426]戒香熏修するをもって、かくのごとき行者、命終らんと欲する時、[427]阿彌陀佛、諸もろの眷属と与に、[428]金色の光を放ち[429]七宝の蓮華を持して行者の前に至りたまうを見る。[430]行者自ら聞けば、空中に声あって、[431]讃じていわく。善男子。汝がごとき善人、三世諸佛の教に随順するが故に、我れ来って汝を迎うと。[432]行者自ら見れば、蓮華の上に坐す。蓮華すなわち合す。[433]西方極楽世界に生じて、宝池の中に在り。[434]七日を経て、蓮華すなわち敷く。[435]華すでに敷きおわれば、[436]目を開き合掌して世尊を讃歎

[411] 来迎感二小根衆一
[412] 佛光照二行者身一
[413] 佛説法讃二出家一
[414] 見聞已喜礼一佛
[415] 挙頭已在二彼国一
[416] 華開遅疾
[417] 華開後益(二)、明二宝華尋開一
[418] 法音讃二四諦一
[419] 聞二四諦一獲果
[420] 総結二中上一
[421] 中品中生(七)、弁二定其位一
[422] 五六七門(三)、受二持八戒斉一
[423] 受二持沙彌戒一
[424] 受二持具足戒一
[425] 廻二所修業一
[426] 迎接去時(八)、行者命延不久
[427] 佛与二比丘衆一来
[428] 佛光照二行者身一
[429] 比丘持レ華来現
[430] 行者見聞空声
[431] 佛讃言レ信二佛語一
[432] 坐二華座一二己華合
[433] 華合已入二宝池一
[434] 華開時節
[435] 華開後益(四)、明二華開見佛一
[436] 明二合掌讃佛一

し、(437)法を聞きて歓喜して須陀洹を得、(438)半劫を経おわって阿羅漢を成ず。(439)これを中品中生の者と名づく。

(440)中品下生の者とは、(441)もし善男子・善女人あって、(442)父母に孝養し世の仁慈を行ぜんに、(444)この人命終らんと欲する時、善知識の、それが為に広く阿彌陀佛の国土の楽事を説き、また法蔵比丘の四十八願を説くに遇えり。(445)この事を聞きおわって、すなわち命終す。譬えば壮士の、譬を屈伸する頃のごときに、すなわち西方極楽世界に生ず。(446)生じて七日を経て、(447)観世音および大勢至に遇い、(448)法を聞きて歓喜す。(449)一小劫を経て、阿羅漢を成ず。(450)これを中品下生の者と名づく。これを中輩生想と名づけ、第十五の観と名づく。

(451)佛、阿難および韋提希に告げたまわく。下品上生の者とは、(453)あるいは衆生あって、(454)衆もろの悪業を作る。(455)方等経典を誹謗せずといえども、(456)かくのごとき愚人、多く衆悪を造って、(457)慚愧あることなし。(458)命終らんと欲する時、(459)善知識の、(460)為に大乗十二部経の首題の名字を讃ずるに遇えり。(461)かくのごとき諸経の名を聞くをもっての故に、千劫の極重の悪業を除却す。(462)智者また教えて、合掌叉手して南無阿彌陀佛と称せしむ。(463)佛名を称するが故に、五十億劫生死の罪を除く。(464)その時かの佛、すなわち化佛・化観世音・化大勢至を遣わして、行者の前に至

(437)聞レ法得二初果一
(438)経レ劫成二羅漢一
(439)総結二中中一
(440)中品下生(七)、弁二定其位一
(441)簡機受法(四)、簡三機堪与二不堪一
(442)孝二父母一順二六親一
(443)性善起二於慈敬一(不三曾見二聞佛法一)
(444)終遇二佛法一
(445)去時遅疾
(446)華開不開
(447)華開後益(三)、遇二観音勢至一
(448)逢二二聖一聞レ法
(449)経レ劫悟二羅漢一
(450)総結二中下一
(451)下輩観善悪(三)、下品上生(九)、総明三告命一
(452)弁二定其位一
(453)簡二機堪不一(五)、挙造悪機
(454)造二作衆悪一
(455)不レ謗二大乗一
(456)非二智者類一
(457)不レ生二愧心一
(458)臨終聞法(六)、明三命延不レ久
(459)遇二往生知識一
(460)善人讃二衆経一
(461)聞法功除レ罪
(462)転教レ称二佛名一

らしめて、[465]讃じてのたまわく。善男子。[466]汝佛名を称するが故に、諸罪消滅せり。我れ来って汝を迎うと。[467]この語を作しおわりたまうに、行者すなわち化佛の光明の、その室に徧満するを見る。[468]見おわって歓喜してすなわち命終す。[469]宝蓮華に乗じて、化佛の後に随いて、宝池の中に生ず。[470]七七日を経て、蓮華すなわち敷く。[471]華の敷く時に当って、大悲観世音菩薩および大勢至、大光明を放って、[472]その人の前に住して、[473]為に甚深の十二部経を説きたまう。[474]聞きおわって信解して無上道心を発し、[475]十小劫を経て百法明門を具して初地に入ることを得。[476]これを下品上生の者と名づく。[477]佛名・法名を聞き、および僧名を聞くことを得、三宝の名を聞きて、すなわち往生を得。

[478]佛、阿難および韋提希に告げたまわく。[479]下品中生の者とは、[480]あるいは衆生あって、[481]五戒・八戒および具足戒を毀犯す。[482]かくのごとき愚人、僧祇物を偸み、現前僧物を盗み、[483]不浄説法して、[484]慚愧あることなく、[485]諸もろの悪業をもって、自ら荘厳す。[486]かくのごとき罪人、悪業をもっての故に、まさに地獄に堕すべし。[487]命終らんと欲する時、[488]地獄の衆火、一時に倶に至る。[489]善知識の、[490]大慈悲をもって、為に阿彌陀佛の十力威徳を説き、広くかの佛の光明神力を説き、また戒定慧・解脱知見を讃ずるに遇えり。[491]この人聞きおわって、八十億劫の生死の罪を除

[463] 称名ノ故除レ罪
[464] 迎接去時(六)、化衆応レ声来現
[465] 化衆同讃ニ行人一
[466] 化讃但述ニ称佛一
[467] 見ニ光明遍ニ満ヲ室一
[468] 蒙ニ光照一命尋終
[469] 乗レ華生ニ宝池中一
[470] 華開遅疾
[471] 華開後益(四)、観音等放ニ神光一ノ
[472] 赴ニ行者宝華側一
[473] 為説ニ前生所開一
[474] 聞法領解発心
[475] 経レ劫証ニ百法位一
[476] 総結ニ下上一
[477] 重挙ニ利益一
[478] 下品中生(七)、総明ニ告命一
[479] 弁ニ定其位一
[480] 簡機造業(七)、挙ニ造悪ノ機一
[481] 多犯ニ諸戒一
[482] 偸ニ盗僧物一
[483] 邪命説法
[484] 総無ニ愧心一
[485] 内外造悪
[486] 験ニ定罪状一
[487] 罪人命不レ久
[488] 明ニ獄火来現一
[489] 現時遇ニ知識一
[490] 説ニ彌陀功徳一
[491] 聞ニ名号一除レ罪

く。[492]地獄の猛火、化して清涼の風となって、[493]諸もろの天華を吹く。[494]華の上に皆、化佛菩薩あって、この人を迎接したまう。[495]一念の頃のごときに、すなわち往生を得。[496]七宝池の中の蓮華の内にして、六劫を経て、蓮華すなわち敷く。[497]華の敷く時に当って、観世音・大勢至、梵音声をもって、かの人を安慰して、[498]為に大乗甚深の経典を説く。この法を聞きおわって、時に応じてすなわち無上道心を発す。[500]これを下品中生の者と名づく。

[501]佛、阿難および韋提希に告げたまわく。[502]下品下生の者とは、[503]あるいは衆生あって、[504]不善の業たる五逆十悪を作して、[505]諸もろの不善を具す。かくのごとき愚人、[507]悪業をもっての故に、[508]まさに悪道に堕して、[509]多劫を経歴して、苦を受くること窮まりなかるべし。[510]かくのごとき愚人、[511]命終の時に臨んで、[512]善知識の、[513]種種に安慰して、為に妙法を説きて、教えて念佛せしむるに遇えり。[514]この人、苦に逼められて、念佛するに遑あらず。[515]善友告げていわく。汝もし念ずること能わずんば、まさに無量寿佛と称すべしと。[516]かくのごとく至心に、声をして絶えざらしめ、十念を具足して、南無阿彌陀佛と称す。[517]佛名を称するが故に、念念の中において、八十億劫の生死の罪を除く、[518]命終の時、金蓮華の、なおし日輪のごとくなるが、その人の前に住するを見る。[519]一念の頃のごときに、すなわち極

492 罪滅火為風
493 天華随レ風来
494 明二化衆来応一
495 明去時遅疾
496 華開時節
497 華開後益(三)、華開梵声安慰
498 為説二甚深妙典一
499 行者領解発心
500 総結二下中一
501 下品下生(七)、総明二告命一
502 弁二定其位一
503 簡機造悪(七)、明二造悪之機一
504 総挙二不善名一
505 明レ簡二罪軽重一
506 明レ非二智人業一
507 多造罪非レ軽
508 非二業不レ受レ報
509 酬報却未レ窮
510 念佛得益(三)、重牒二悪人一
511 命延不レ久
512 遇二善知識一
513 教二念佛一
514 無由二念佛一
515 転教二口称一
516 声々無間
517 除罪多劫
518 金華来応
519 去時遅疾

楽世界に往生することを得。[520]蓮華の中において、十二大劫を満じて、蓮華まさに開く。[521]観世音・大勢至、大悲の音声をもって、それが為に広く諸法実相、除滅罪の法を説く。[522]聞きおわって歓喜して、[523]時に応じてすなわち菩提の心を発す。[524]これを下品下生の者と名づく。これを下輩生想と名づけ、第十六の観と名づく。

○第三

[525]この語を説きたまう時、[526]韋提希、五百の侍女と与に、佛の所説を聞き、[527]時に応じてすなわち極楽世界の広長の相を見る。[528]佛身および二菩薩を見ることを得て、心に歓喜を生じて、未曽有なりと歎じて、廓然として大悟して、無生忍を得。[529]五百の侍女、阿耨多羅三藐三菩提心を発して、かの国に生ぜんと願ず。[530]世尊、悉く皆まさに往生すべし、かの国に生じおわりなば、諸佛現前三昧を得んと記したまう。[531]無量の諸天は、無上道心を発す。

○第四

[532]その時阿難、すなわち座より起ちて、前んで佛にもうしてもうさく。世尊。まさに何んがこの経を名づくべき。この法の要をば、まさに云何が受持すべき。[533]佛、

[520] 華開遅疾
[521] 華開後益(三)、為宣深法
[522] 除罪歓喜
[523] 後発勝心
[524] 総結下下
○第三　得益(七)
[525] 牒前生後益
[526] 明能聞法人
[527] 明光台見土
[528] 明夫人得忍
[529] 明侍女発心
[530] 侍女蒙尊記
[531] 臨空諸天益
○第四　流通(七)
[532] 阿難請発
[533] 佛答初問

阿難に告げたまわく。この経を観極楽国土無量寿佛観世音菩薩大勢至菩薩と名づけ、また浄除業障生諸佛前と名づくべし。[534]汝まさに受持して、忘失せしむることなかるべし。[535]この三昧を行ぜん者は、[536]現身に、無量寿佛および二大士を見ることを得ん。もし善男子・善女人、[537]ただ佛の名、二菩薩の名を聞くすら、無量劫の生死の罪を除く。何にいわんや憶念せんをや。[538]もし念佛せん者は、[539]まさに知るべし。この人は、[540]これ人中の分陀利華なり。[541]観世音菩薩・大勢至菩薩、その勝友となる。[542]まさに道場に坐すべきをもって、諸佛の家に生ずべし。[543]佛、阿難に告げたまわく。汝好くこの語を持せよ。この語を持せよとは、すなわちこれ無量寿佛の名を持せよとなり。[544]佛、この語を説きたまう時、尊者目犍連・阿難および韋提希等、佛の所説を聞きたてまつりて、皆大いに歓喜す。[545]

○第五

[546]その時世尊、足、虚空を歩みて、耆闍崛山に還りたまう。[547]その時阿難、広く大衆の為に、上のごとき事を説く。[548]無量の諸天および龍・夜叉、佛の所説を聞きたてまつりて、皆大いに歓喜して、佛を礼したてまつりて退きぬ。

佛説観無量寿経

534 佛答二後問一
535 勧二持定善一(四)、立二三昧之名一
536 依観修行益
537 重挙二行教機一
538 明二比挍顕勝一
539 勧二持念佛一(五)、専二念彌陀佛名一
540 指二讃能念之人一
541 引二分陀利一為レ喩
542 二大士如二親友一
543 入二佛家一坐二道場一
544 付二属念佛一
545 聞見喜躍
546 序分
547 正宗
548 流通

○第五　耆闍(三)